

## 枕草子の美意識

——非充足性への志向をめぐって——

### 一 序

沢田正子

枕草子の美意識については従来さまざまの角度から論じられ、源氏物語のあはれに対するをかしいの美学という対照的把握に象徴される、明るく知的な潑刺とした美がその生命として高く評価されてきた。定子を中心とする名家への徹底的信頼と敬愛を軸としてそのサロンに繰り広げられる美学は王朝文化の伝統を確実に継承し、さらに作者独自のたぐいまれな才気と感受性が投入されて完成したものであると説かれている<sup>1)</sup>。確かに枕草子という作品の中には明朗・活発・鮮明・才気等、明晰な歯切れのよい感覚が随所に見られ、微塵の暗さや翳りもないといえるかもしれない。

ところで枕草子ほどほぼ同時代の作品の源氏物語と比較対照的に扱われるものも少なく、あらゆる角度から源氏物語との相關関係において評価されることが多い。たとえば、あはれ・薄明・含蓄・長文・文語的・ことのは的・行動の連続性・複雑(《源氏物語》)、をかし、鮮明・率直・短文・口語的・ことば的・行動の非連続性・単純

《枕草子》などはその例である。<sup>(2)</sup> いわば源氏物語との対照評価により枕草子の最も枕草子らしい特色が把握され、従ってその美意識も対源氏物語的な観点よりとらえられる場合が多いことになる。つまり反源氏要素が、ある意味で最も枕草子らしき特徴であり、逆に反枕草子的要素が源氏物語の主要な特徴と見做されることも多いわけである。

ところで源氏物語の美意識について細かに検討してみると反枕草子的なニュアンスが強いことは確かである。美の定義は多様で一概に規定できないが、明るく花やかな満ち足りた、いわゆる「美」と見做されるものと、それとは異質な、どこかに鬩りのある消極的な傾向のそれとの二つのサークルを考えた場合、源氏物語の中には人事の場合にも自然の場合にもかなりの比重を占めて後者の美が存在していることがわかる。<sup>(3)</sup> 花でいえば盛りの花ではなく少し色が移ろい消え・衰えに向かう状態にあるもの、人でいえば花やかな衣裳で善美を尽くした姿より喪服や素服にやつれたもの、季節・天候でいえば春の陽ざかりより晩秋の時雨や木枯のころ、等、精一杯の花やぎから一步退いた状態にあるものに対して深い美的関心が払われているのである。そしてこのような消極性を志向する美意識こそは枕草子のそれとごく対照的に見做されるわけであるが、果たして枕草子という作品はいわゆる反源氏物語的な充足的な積極性に根ざす美しさのみに満たされ、それ以外の美的要因が介入する余地は全くないのであるうか。枕草子はいわゆる枕草子的な美しさのみから成り立っているのであるうか。

いや、それが多分にあることは疑う余地はないが、かと言ってそのみに限られているわけではなく、その内質を虚心に見てゆくともつと幅広い様々の形の美学が―源氏物語的なそれも含めて―多様に培われ、かなり重層的な美的世界が構築されているように思われるのである。根来司氏は「枕草子の文体は一見瞬間的なテンポの早い印象が強いが、実際にはかなり低徊した表現がとられ内省が隠されている場合が多い(要約)」ことを指摘されているが<sup>(4)</sup> それと同様なことが美意識の面でもある程度伺われるのではなからうか。一面的な、単純・明快な美のみではなく、その反対の極のものも含めてもつと陰影のある多様な美が内包されているところに枕草子美学の真の魅力が隠されているのではなからうか。

ここでは以上のような観点より、従来あまりにも一面的に評価されがちであった枕草子の美意識のもう一つの側面について、これまでの最も枕草子的な面も十分に考慮に入れて考え、この作品の美意識の再検討としたい。

後の俊成や定家は数ある物語類の中でことに源氏物語に着目し積極的に和歌文学に採り入れていったが、その際彼らの美学と源氏物語とのそれがどこかで重なるものがあつたと考へるのは自然であろう。中世的美学に近いと思われる源氏物語の消極面での美が彼らに何らかの共感を与えたのではないかということは十分考えられることと思うが、枕草子の中にももしそうした美が見出されるとしたら、なぜこの作品が彼らによつて源氏物語ほどに顧られなかつたのか、そうした事情を探る手がかりになるかもしれない。二つの作品の美意識の問題について改めて考えてみたい。

・テキストは三巻本を用い日本古典文学大系(岩波)による。源氏物語の引用も同じく大系本による。

・枕草子は構成上、日記的章段、随想的章段、類聚章段の三部分を考へるのが普通であり、成立論、諸本をめぐつて複雑な問題が残されているが、ここではそれらについては一切ふれずに論をすすめてゆきたい。

## 二 蘭<sup>か</sup>け・残り・消えの美

全盛の中閨自家のサロンを象徴するかのよう清少納言の目も明るく潑刺としたさかりの状態にあるものに対して、一種の憧れにも似た美意識が触発されていることが多いことは言うまでもない。枕草子には人事を扱つた場合にも自然の場合にも、また双方が融合している場合にも、人と物とがそれぞれ最も充実した花やぎに満たされている場合において惜しめない美的関心が払われていることが実に多いのである。美しさをこめて咲く花、花やかな容姿に善美を尽くして装いをこらす人、若さ、みずみずしさを最大限に発輝している若人の姿、等、その命を最も美しく燃焼させている状態にあるものに対して慈しみにも似た美的感動がこめられているのである。これは誰しもが美しいと感ずるもので王朝文化の伝統美に則するものであるが、彼女の場合、その性格、感受性か

らしてそこに一層の光彩を添えることになる。

(4)桜は花びらおほきに葉の色こきが、枝ほそくて咲きたる。藤の花はしなひながく色こく咲きたる、いとめでたし。

〈三七・木の花は〉

(向めでたきもの……色あひふかく、花房ながく咲きたる藤の花の、松にかかりたる。

〈三八・めでたきもの〉

(秋、いと色ふかう、枝たをやかに咲きたるが、朝露にぬれてなよなよとひろごりふしたる、……心ことなり。

〈六七・草の花は〉

色濃くゆたかにその命を精一杯に育む種々の自然、

(5)勾欄のもとにあをき瓶のおほきなるをすゑて、桜のいみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、勾欄の外まで咲きこぼれたる……御簾のうちに女房、桜の唐衣ども……藤山吹など色々このまじうて、

〈三三・清涼殿の丑寅のすみの〉

(6)三月三日はうらうらとのどかに照りたる。……おもしろくさきたる桜をながく折りて、おほきなる瓶にさしたるこそをかしけれ。桜の直衣に出桂して、

〈四・三月三日は〉

陽春の日盛りのたつぷりとした見事な桜と色々の衣々、ともに花やかな自然と人事との交錯、

◎桜の直衣のいみじくはなばなど、裏のつやなども、えもいはずきよらなるに、葡萄染のいと濃き指貫、藤の折枝おどろおどろしく織りみだれて、くれなゐの色、打ち目など、かがやくばかりぞ見ゆる。……まことに絵にかき、物語のめでたきことにいひたる、これこそはとぞ見えたる。

〈八三・かへる年の二月廿日よ日〉

と全身を輝くばかりにしたたてた貴公子の姿、また、

(7)十八九ばかりの人の、髪いとうるはしくてたけばかりに裾いとふさやかなる、いとよう肥えていみじう色しろう、顔愛敬つき、よしと見ゆるが、

〈一八九・十八九ばかりの人の〉

(8)若き人、ちごどもなどは肥えたるよし。

〈五八・若き人、ちごどもなどは〉

とゆたかに充足した健康美への憧れ、等、それぞれの最も充実した状態において明朗で健やかな美意識が触発さ

れているのである。

このような美への関心は極めて枕草子的であるという反面、平安の伝統美が確実に継承されたものであるが、さらに作者天性の明朗で新鮮な感覚が色濃く投入されたものであるといえよう。

ところで一方の源氏物語にもそうした美への関心はもちろん認められるが、そのほかにやや性格の異なるもの―花やぎ、さかりの状態から一步遠のき、消え・衰えに向かうような消極的状态において見出されるもの―が、かなりの度合で認められるのである。自然でいえば満開の花ではなく少し色の移ろったもの、秋のさかりの虫の声ではなく晩秋のころの鳴きかれた声、陽春の緑の野辺ではなく蕭々と木枯の鳴る枯野等、人の姿では、花やかな装束ではなく喪服・素服などにやつれている時、病や心労でゆたかな黒髪やふくらかな面ざしが衰えたとき、等、消極的な閑けさのなかに全盛の光輝に満ちた美しさとはまた趣きの異なったものを見出していることが多いのである。たとえば、

⑦ 遙けき野辺を分け入りたまふより、いとものあはれなり。秋の花みな衰へつつ、浅茅が原も、かれがれなる虫の音に、松風すしく吹きあはせて、その事とも聞きわかれぬほどに、物の音ども絶えだえ聞えたる、いと艶なり。〔寶木・三六八〕

有名な野の宮の段、自然の諸景物のひとつひとつが盛りからそれ、衰えに向かっている状態にある晩秋の嵯峨野、そこにほんのかすかな琴の音、滅びゆく自然の美があますところなく尽くされているところである。また、人事の面では、

⑧ 無紋のうへの御ぞに、鈍色の御下襲、縹<sup>あざ</sup>巻<sup>まき</sup>給へるやつれ姿、花やかなる御よそひよりもなまめかしさまさり給へり。

〔葵・三五五〕

⑨ いとさかりに匂多くおはする人の、さまざまの御物思ひに少しうち面やせ給へる、いとあてになまめかしき気色まさりて

〔早蕨・一一二〕

⑩ もの思ひに沈みたまへるほどのしわざにや、髪<sup>かみ</sup>の裾すこし細りてさはらかにかゝれるしも、いともの清けに、

〔初音・三三二〕

①は葵上の喪に服す光源氏の姿、②は父と姉に先立たれた宇治の中君、③は筑紫から上京したばかりの玉鬘である。それぞれの苦悩を経て栄花から退いた状態に、その折とはまた別の美しさを覚えているのである。

これらはさきにあげた枕草子の特徴と対照的で、きわめて反枕草子的であるともいえるかもしれないが、しかし実際には枕草子の中にもそうした消極美への志向が全くないというわけではなく、程度の差こそあれ、軽いものも含めればかなり多様な角度からそれが認められるのである。自然の場合にも人事の場合にも一般にはきわめて枕草子的と見做される充足的な状態から、何らかの形で後退しているところに不思議な美意識が触発されている場合がしばしば散見するのである。たとえば自然を中心にしたものを見てゆくと、

(1)御前の梅は、西はしろく、東は紅梅にて、すこし落ちがたになりたれど、なほをかしきに、うらうらと日のけしきのどかにて、人に見せまほし。  
 〈八三・かへる年の二月廿日よ日〉

(2)雪は、檜皮茸、いとめでたし。すこし消えがたになりたるほど。  
 〈二五一・雪は檜皮茸〉

(3)日は入り日。入りはてぬる山の端に、光なほとまりて赤う見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきわたりたる、いとあはれなり。  
 〈二五二・日は入り日〉

花ざかりを過ぎて少し落ちがたになった梅、彼女のシャープな性癖から一見切り捨てられてしまふところであるが、その落ちめの梅の花がうらかな陽に配された姿は心ある人に見せたいほどという。また真白に積もった雪が少し消えかかったところ、赤々とした夕日が完全に落ちた後の残照の風情、いずれも全盛の装いから少し離れた、滅びゆく運命にあるようなものに何か心ひかれるものを覚えているのである。

次は滅び・衰えの意識がさらに深まったもので、

(4)あはれなるもの……九月のつごもり、十月のついたちのほどに、ただあるかなきかに開きつけたるきりぎりすの声  
 〈一一九・あはれなるもの〉

(5)九月つごもり、十月のころ、空うち曇りて風のいとさわがしく吹きて、黄なる葉どものほろほるとこぼれ落つる、いとあはれなり。桜の葉、棕ぐらの葉こそ、いととくは落つれ。  
 〈一九九・九月つごもり十月のころ〉

(6) 秋の野のおしなべたるをかしきは薄こそあれ。穂さきの蘇枋にいと濃きが、朝露にぬれてうちなびきたるは、さばかりの物やはある。秋のはてぞいと見どころなき。色々にみだれ咲きたりし花のかたちもなく散りたるに、冬の末まで、かしのいとしろくおほどれたるも知らず、むかし思ひ出顔に、風になびきてかひろぎ立てる、人にこそいみじう似たれ、よそふる心ありて、それをしもこそ、あはれと思ふべけれ。  
 (六七・草の花は)

秋たけなわのころ花やかに鳴きたてていたきりぎりすの、晩秋から初冬にかけてのすつかり鳴き枯れてしまった声、見事な錦の装いを捨てて曇り空と冷たい風の中をはらはらと散り急ぐ木の葉、秋草の王者である薄の秋の果てのすつかりしらみ枯れた姿、それらは古の面影、往時の花やぎを彷彿とさせるのみであるが、変わり果てた姿にその折とは別の感懐深い美感が意識されている。陽気で明るくうららかな陽春のイメージにびつたり作者も、こうした滅び消えてゆく過程にある自然に対しても深い配慮と慈しみの思いを忘れてはいないのである。

次は人事と自然が交錯している場合である。

(7) すぎにしかた恋しきもの 枯れたる葵。ひひなあそびの調度。二藍、葡萄染などのさいでの、おしへされて草子の中などにありける見つけたる。……こそのかはほり。  
 (三八〇・すぎにしかた恋しきもの)

(8) 五月の菖蒲の秋冬過ぐるまでであるが、いみじうしらみ枯れてあやしきを、ひき折りあげたるに、そのをりの香の残りてかかへたる、いみじうをかし。  
 (二二〇・五月の菖蒲の)

(9) よくたきしめたる薫物の、昨日、一昨日、今日などは忘れたるに、ひきあげたるに、煙の残りたるは、ただいまの香よりもめでたし。  
 (二二一・よくたきしめたる薫物の)

すつかり枯れてしまった葵、もちろん賀茂祭の時、あの花やぎの日にどこかの装束にでもつけられていたのである、その枯れ枯れな姿にあの折の栄花をしみじみと偲ぶ。季節を越えて枯れ残った五月の菖蒲、しらみ枯れて押花のようになった一ひらをあげてみるとふと残り香が漂ってくる。二、三日前の薫物、忘れていたのを思い出しとり出してみるとまだ余香がある。それはたきしめたばかりのころよりすてきな風情があるという、いずれも見事な残りの美である。むかしのひひな遊びの調度や押しつぶされたさいで(布切)、去年の扇なども心は同じである。

次は人事を中心にしたものでまず服飾に関するものである。

⑩十七八ばかりやあらん、ちひさうはあらねど、わざと大人とは見えぬが、生絹の単のいみじうほころびたえ、はなもかへりぬれなどしたる、薄色の宿直物を着て、髪、いろに、こまこまどうるはしう、末も尾花のやうにて……簾に添ひたるうしろでもをかし。

二二〇〇・野分のまたの日こそ

⑪人はいでにけるなるべし、うす色の、うらいとこくて、うへはすこしかへりたるならずは、こき綾のつややかなるが、いとなえぬを、かしらごめに引き着てぞ寝たる。

二二〇一・七月ばかりいみじうあつければ

⑫きよげなるわらはべなどの、相どものいとあざやかなるにはあらで、なえばみたるに、履子のつややかなるが齒に土おほくつきたるをはきて……いくこそ、いみじう、呼びよせて見まほしけれ。

二二〇二・ものへ行く路に

ほころびて少し色の落ちた薄色の単を着た美しい髪乙女、その御簾ごしの風情は優美である。朝、男の去った後、少し色のさめた薄色の衣か、あまりひどくは糊のとれていない濃い綾を被いて臥す人、あまりぱつとしない萎えた裵に土のついたきれいな履子をはいた童、それぞれほころびたり色がさめたり糊がとれたりしてやや程度の衰えたものが周囲の素材とのふとした組合わせにより意外な情趣を導いている。新品の衣裳より、少し着なれほどよく着古したものに懐しさにも似た風情を覚えているのであり、こうした、花やぎから幾分抑制された服飾に求められる美意識は次のような喪服の趣きの中にも見出される。

⑬男も、女も、わかきよげなるが、いとくろき衣を着たるこそあはれなれ。

二二〇三・あはれなるもの

⑭故殿の御服のころ……わかき人々廿人ばかり……階よりたかき処にのほりたるをこれより見あぐれば、あるかぎり薄鈍の裳、唐衣、おなじ色の単襲、くれなるの袴どもを着てのほりたるは、いと天人などこそえいふまじけれど、空より降りたるにやとぞ見ゆる。

二二〇四・故殿の御服のころ

常の色を隠した黒または薄墨の装いは、若く美しい人々の花やぎがおさえられているだけに、より深いあわれな美しさを誘う。ことに後者の例は主家全盛の折、咲きこぼれるような女房たちの色々の衣々を随所に記しているだけにそのつつましい装いにより深い感懐をこめて静かな美しさを見出しているであろう。

また、やや趣きは異なるが服飾のほかにも人間生活の他の側面にも伺われ、

御ことにきらきらしからぬ男の、たかきみじかきあまたつれだちたるよりも、すこし乗り馴らしたる車のいとつややかなるに、牛飼童、なりいとつきづきしうて、……おくるるやうに綱引かれて遣る。

△二〇三・ことにきらきらしからぬ男の△

御なまめかしきもの……いとあたらしからず、いたうものふりぬ檜皮葺の屋にながき菖蒲をうるはしうふきわたしたる。

△八九・なまめかしきもの△

さえない従者を多く連れるより、新品でなくちよつと乗り馴らした車にふさわしい童をつけている様、あまり新しくもなくそう古びてもいない檜皮葺の家に長く菖蒲をふいた様子、ほどよい古さのものが適切な事物との組合せにより一段と快い趣きを呈しており、そのものの単独の美だけではなく組合せ・とり合わせによる効果は大きい。

充足的なさかりの美しさに満たされているような印象を受けやすい枕草子であるが、以上のように全盛から少し退いた状態の中に、蘭け、残り、消えの美ともいべき消極性を志向する美意識が様々に認められることがあり、他の条件・事物との効果的な組合せによりその消極的美感がより印象的に美しく生かされている場合が少なくないのである。

### 三 不鮮明・薄明の美

鮮明なくつきりとした色あざやかな美しさは枕草子美学の代表格といえよう。<sup>7)</sup> 切れ味のよいシャープなはつきりした状態に認識される美的感覚は清少納言の潑刺とした明るい感受性と定子のサロンの明朗・聡明な雰囲気とよく呼応するものであろう。くもりのないさわやかさ、あざやかな美麗な感覚は鋭角・直截・鮮明等を主要な美的イメージとする枕草子の生命ともいえる。ぼんやりとした曖昧な感覚、とらえどころのないような線の弱さ等

はこの草子とはあまり縁がないようである。たとえば草子のはじめのころ、四・五月ごろの自然を写した記事を見てゆくと

(4) 四月、祭の頃いとをかし。……木々の木の葉、まだいとしげうはあらで、わかやかにあをみわたりに、霞も霧もへだてぬ空のけしきの、なにとなくすずるにをかしきに、  
 〈五・四月祭の頃〉

(5) 四月のつごもり、五月のついでたちの頃ほひ、橘の葉のこくあをきに、花のいとしろう咲きたるが、雨うちふりたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。花のなかりこがねの玉かと思えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露にぬれたるあざぼらけの桜におとらず。  
 〈三七・木の花は〉

霞も霧もなくつつきりと澄んだ空、濃い緑に純白の花と鮮かな小金色の実をつけた橘の木、おぼろに霞んだところのないさわやかな冴えた感覚である。また鮮明のなかにあでやかな色どりが加わると、

(6) すこし日たくるほどに三位中将・濃蘇枋のしたの御袴に、はりたるしろきひとへのいみじうあざやかなるを着給ひてあゆみ入り給へる……いといみじうめでたしとぞ見え給ふ。朴、塗骨など骨はかはれどただあかき紙をおしなべてうちつかひもたまへるは、撫子のいみじう咲きたるにぞいとよく似たる。  
 〈三五・小白河といふ所は〉

(7) いみじう暑き昼中に……こちたう赤き薄様を唐撫子のいみじう咲きたるに結びつけてとり入れたるこそ、書きつらんほどの暑さ、心ざしのほど浅からずおしはかられて、かつ使ひつるだにあかずおぼゆる扇もち置かれぬれ。  
 〈一九二・いみじう暑き昼中に〉

(8) は小白河八講の折で、真夏の日ざかりに鮮かな衣裳と撫子の花盛りを思わせる真紅の扇、(9) も同じく酷暑の暑さがり、見事に咲き乱れた撫子につけられた真赤な色紙、ともに時節柄あまりふさわしくない色どりが小気味よいような鮮かさでその場にびたりとあつて清々しささえも添えている。常識的な色彩感覚を超えた作者の見事な切れ味の感じられるところである。

さて次にさらに多様な色どりが添えられると、

(9) 簾の外、勾欄に、いとをかしげなる猫の、あかき首綱にしろき札つきて、村濃の綱ながう引きて、いかりの緒、組のながきなどつけて引きありくも、をかしうなまめきたり。  
 〈八九・なまめかしきもの〉

①くれなゐの御衣ども、……あまた奉りて、いとくろうつややかなる琵琶に御袖打ちかけてとらへさせ給へるだにめでたきに、そはより御額の程のいみじうしろうめでたくげざやかにてはづれさせ給へるは、たとふべきかたぞなきや。

〈九四・上の御局の御簾の前にて〉

紅・白・紫、美しく装束いた殿中の猫、紅の衣に黒くつややかな琵琶、そして真白な額と黒髪の定子、鮮かな色彩と鮮明な輪郭、枕草子の最も枕草子的な筆づかいが感じられるところである。

ところで一方の源氏物語にはこれとごく対照的なおぼろおぼろとしたほのかな一枚のヴェールをかぶせたような状態に、すべてが見えきらない淡くとらえがたいようなゆかしさを覚えていることがある。たとえば野分の巻、朝霧のたちこめる庭に色々の衣に装つた童女たちが虫籠に露を飼わせながら群れている様を記して「霧のまよひはいと艶にぞみえける」(野分・五四)と評しているところなどはその典型的な例である。が、枕草子の中にもこの種的美が全然ないわけではなく、さきの鮮明なそれとは対照的な不鮮明・薄明の美ともいえるものが一面で育まれていることもたしかなのである。形態・程度は様々であるが、ほのか、かすか、おぼろ等、シャープな際やかな感覚とは異質の奥深いつましい美しさが問われていることもあるのである。

対象が如何に隠されてはつきり見えないとき、光や灯が鈍くぼんやりしているとき、何かを隔てているときなど、もう少し見えたらとゆかしく思うところに非常な美しさが彷彿とする。また、一見気づかぬところにふとした美を探りあてたとき。その多くは直接的に対象を把握するというよりきわめて間接的なニュアンスが強いことになる。たとえば、

(1)なにの君とかやいひける人のもとに……心ばせなどある人の、九月ばかりにいきて有明のいみじう霧りみちておもしろきに、名残思ひいでられんことばをつくして出づるに、いまは往ぬらむと遠く見送るほど、えもいはずえんなり。

〈一八〇・ある所になにの君とかや〉

(2)賀茂の臨時の祭……使はかならずよき人ならず、受領などは目もとまらずにくげなるも、藤の花にかくれたるほどはをかし。

〈二二〇・賀茂の臨時の祭〉

(1)は有明の深い霧の中、情を残して去つてゆく男を遠くまで見送る女、霧のヴェールはその場の光景を鮮明に写し出さないかわりに心にくいゆかしさを演出する。さきの源氏物語の例とまさに同じ趣興である。(2)は臨時の祭の折、見栄えのしない受領などの姿も挿頭の藤の花かげに隠れたりすると不思議に優美に見えたりする。ともに何かの媒介によりすべてが露出しないうちに奥行きのある余情美が期待されているのである。また、照明などがおぼつかない状態にある場合にも同様な趣きが伺われる。

(3)いみじうしつらひたる所の、大殿油はまゐらで、炭櫃などいとおほくおこしたる火の先ばかり照りみちたるに、御帳の紐などのつややかに向ち見えたる、いとめでたし。  
 〆二〇一・心にくきもの〆

(4)額髪長やかに面やうよき人の、暗きほどに文を得て、火ともすほども心もとなきにや、火桶の火をはさみあげて、たどたどしげに見ゐたるこそをかしけれ。  
 〆二九四・今朝はさしも見えざりつる空の〆

(5)雪のいと高う降りつもりたる夕暮より、……火桶を中にすゑて物語などするほどに暗うなりぬれどこなたには火もともさぬに、おほかたの雪の光いとしろう見えたるに、火箸して灰など掻きすさみて、あはれなるもをかしきもいひあはせたるこそをかしけれ。  
 〆二八一・雪のいと高うはあらで〆

夕暮または夜、大殿油もともさず火桶や炭櫃の火、雪あかりなどのほのかな光の中にぼうつと照らし出された室内や人々、その鈍い光の中に、はつきりと見えきつてしまふ以上の幻想的な美しさが演出されている。また解釈上やや問題が残るが次の例などもその好例であらう。

(6)ころときめきするもの……唐鏡のすこしくらき見たる。

〆二一九・ころときめきするもの〆

諸説があつて一定しないが、私は、上等の舶来の鏡ですこし翳りをもっているものを見た感じ、または唐鏡を少し光のかげつた所で見つた場合、等、いずれにせよ「見る」を鏡そのものを見るのではなくそこに自分の顔を映してみるとりた。何かの加減で鏡の中の自分の顔がはつきり見えな、つまり霧のかかったような鏡面にぼうつと映し出されたわが顔が現実以上に美しく見えて思わずどきつとしてしまふ、そういうところではなからうか。そう解釈してはじめて清少納言のいじらしいような女心が感じられるような気がする。

次は対象が何かに隔てられ間接的にそれを察知する場合である。

(7) 心にくきもの ものへだてて聞くに、女房とはおぼえぬ手の、しのびやかにをかしげに聞えたるに、こたへわかやかにしてうちそよめきてまゐるけはひ。

・ものうしろ、障子などへだてて聞くに、御膳まゐるほどにや、箸・匙など、とりませて鳴りたる、をかし。

△二〇一・心にくきもの

(8) 人の臥したるに、物へだてて聞くに、夜中ばかりなど、うちおどろきて聞けば、起きたるななりと聞えていふことは聞えず男もしのびやかにうちわらひたるこそ、なにことならんとゆかしけれ。

△二〇一・心にくきもの

襖や障子・几帳など何かを隔てて見えない、よく聞こえない向こう側の様子を察すること、それは実際に目に近く見る以上に、はっきりと聞く以上に、臚化された想像の余地・広がりがあり、間接・曖昧を基調とする美的感覺のひとつのあらわれであろう。そしてこれがさらに現実面に展開すると、

(9) なげのことばなれど、せちに心ふかく入らねど、いとほしきことをばいとほしとも、あはれなるをば「げにいかにも思ふらん」などいひけるを伝へ聞きたるは、さし向ひていふよりもうれし。 △二六九・よろづのことよりも情あるこそ

という、広い意味での間接美への憧れにつながってゆく。

これまで何かの事情でそのものが正確にとらえられないところに生ずる余情美について見てきたが、次に対象そのものが何らかの形で不鮮明な状態にあるものについて考えてみたい。

御梨の花、よにすさまじきものにして……愛敬おくれたる人の顔などを見てはたとひにいふも、げに葉の色よりはじめて、

あいなくみゆるを、もろこしには限りなきものにて、ふみにも作る、なほさりともしやうあらんと、せめて見れば、花びらのはしに、をかしき匂ひこそ、心もとなうつきためれ。 △三七・木の花は

御木々の木の葉、まだいとしげうはあらで、わかやかにあをみわたりたるに……すこしくもりたる夕つかた、よるなど、しのびたる郭公の、遠くそらねかとおぼゆばかり、ただたどしきをききつけたらんは、なに心地かせん。

△五・四月祭の頃いとをかし

一見とりたてた風情もなくつまらなく見える梨の花、異国の文人たちの心をしのびせめて近くに寄ってみると花びらの端に雅びな匂いがほんのかすかに漂っている。若緑の夕暮の空、遠く空音からと思われるほどのほんのかすかなほととぎすの声。ほとんど気のつかないようなほのかさ、たどたどしさ、そのおぼろな様子にヴェールの奥をしのぶような趣きを感じとっている。また、

⑫燈籠に火ともしたる、二間ばかりさりとて簾高うあげて女房二人ばかり、童など……臥したるもあり。火取に火深く埋みて心ほそげににははしたるも、いとのだやかに心にくし。

〈一九三・南ならずは〉

⑬宵うち過ぐるほどに……、かたはらにいとよく鳴る琵琶のをかしげなるがあるを、物語のひまひまに、音もたえず、爪弾きにかき鳴らしたるこそをかしけれ。

〈一九三・南ならずは〉

燈籠の火を背景にわずかの女房や童たち、そこに火取の中によろりと深く埋めてほんのかすかにくゆらした香の煙、夜も更けたころ、物語の合い間合い間に撥も使わずそつと爪弾きにした琵琶のしらべ、それぞれすべてを出しきらないほのかなしのびやかな状態に心にくいような情趣を意識している。

直截・鮮明のイメージの強い枕草子であるが、以上のような不鮮明・薄明の美ともいえるいわば反対の極にあるような美的関心も十分に育まれているのであり枕草子美学の重層性、多様性があらためて認識されるのではないかと思う。

#### 四 不十分・非充足の美

前章である意味で枕草子らしからぬ印象を受けやすい不鮮明・薄明の美について見てきたが、ここではそれと幾分重なるむきもあるかも知れないが、すべてにゆきわたり十分満ち足りた状態ではなく、もう少し何かを補いたいような、不十分ゆえのもの足りなさ、空白感・余白感に由来する美意識について考えてみたい。

満ち足りている、たつぷりとゆきわたっている、そうした充足した状態への快い憧憬、これもいわゆる枕草子

的感觉にびったりと重なるものである。この草子の中にはそうした豊饒な状況への讚美がしばしば吐露されている。

(イ)めでたきもの……ひろき庭に雪のあつく降り敷きたる。

(ロ)香の紙のいみじうしめたるにほひ、いとをかし。

いさて行くに、たき物の香のいみじうかかへたるこそ、いとをかしけれ。

△八八・めでたきもの△

△三六・七月ばかりいみじうあつければ△

△五九・ちごはあやしき弓△

広い庭にたつぷりとあつく降り敷いた雪、雪をこよなく愛したという彼女のときめきが伝わってくるようである。そして十分にしみこませた薫物のかおり。また、

(ニ)・こころゆくもの よくかいたる女絵の、ことばをかしうつけておほかる。

・物見のかへさに乗りこぼれて、をのこともいとおほく、牛よくやる者の車はしらせたる。△三一・こころゆくもの△

上手にかいた女絵にすてきな詞書がたくさんついているもの、物見の帰りに(女房たちが)乗りこぼれ美しい衣々がたくさんこぼれている車、そこに大勢の従者が景気よく従っている様子、各々心ゆくまで充足した状態に好意の目が向けられている。

この感覚も明るくて陽気な枕草子の雰囲気によく呼応するものであるが、さきに見たようにここでもそれと対照的な不十分な満たされない非充足感からくる美意識が触発されていることもあるのである。主に量の少なさ、僅かさというごく単純なものから心理的非充足感を基調としたものまで自然・人事を問わずに多様な形で見出される。たとえば、ごく軽いものをあげれば、

(1)雪のいと高うはあらで、うすらかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。

(2)雪は檜皮茸、いとめでたし。……いと多うも降らぬが、瓦の目ごとに入りて黒うまろに見えたる、いとをかし。

△八一・雪のいと高うはあらで△

△二五一・雪は檜皮茸△

さきのあつく降り敷いた雪に対してうつつらと積もった雪、ほんの少し降って瓦の目にこまごまと入ったもの、

(3) 月は有明の、東の山ぎはほそくて出づるほど、いとあはれなり。

(4) 夏はよる。月の頃はさらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。またただひとつふたつなど、ほのかにうちひかりて行くもをかし。

△一・春はあけほの△

山際にほっそりと出た有明の月、多くの螢もよいがひとつふたつなどがそつと飛ぶさま、こうしたひかえめな自然の諸形象、そして、

(5) 枕がみのかたに、朴にむらさきの紙はりたる扇、ひろがりながらある。みちのくに紙の畳紙のほそやかなるが、花かくれなぬか、すこしにほひたるも、几帳のもとにちりほひたり。

△二六・七月ばかりいみじうあつければ△

男君が帰った後、「いみじうしめたる香」と対照的な「すこしにほひたる」ほそ細やかな畳紙。十分でない、ほんの少しの香りはこの場にふさわしいなまめかしい余情を添える。

この十分満ち足りていないものへの関心はそのものの一部のみが見えてそこから残りの部分をゆかしく思うという美意識にもつながってゆく。たとえば次の髪の写真である。

(6) 心にくきもの……よう打ちたる衣のうへにさわがしうはあらで、髪の振りやられたる、長さおしはからる。

△二〇一・心にくきもの△

(7) 香染のひとつへ、もしは黄生絹のひとつへ……袴の腰いとながやかに衣の下よりひかれ着たるも、まだとけながらぬめり。そとのかたに髪のうちたなはりてゆるらかなる程ながさおしはかられたるに。

△二六・七月ばかりいみじうあつければ△

光沢のある衣にほどよく髪がふりかかっている様子、几帳の外に髪が重なってゆったりと出ている具合、全部は見えないがわずかな視野から全体の見事さが彷彿とし、十分に見える以上の美的効果が期待されている。これはあの有名な「宮にはじめてまゐりたるころ」の段で、袖口からちらっと見えた薄紅梅におった手から定子の限りない美しさと高貴さとを強烈に印象づけられる条と通じてゆく。

この不十分さへの憧れがさらに積極的に働くと、充足されぬゆえのもどかしさ、もの足りなさから生ずる心理的非充足感が際立った美的世界を構築する場合がある。これは人事を扱った面に多く見られるが、自然の場合でも次のほととぎすの例などはその典型である。ほととぎすの瞬間的な命の短さゆえの美感は和歌の伝統に則したものであるが、彼女の場合その憧れは一層鮮烈である。まず反対の極にある鶯の否定から入ってゆく。

鶯は春告鳥、その名があればこそ、「夏・冬の末まで老いごゑに鳴」いて「むしくひ」などという妙な名を付けられては心外である。やはりその名にふさわしく春の間だけ鳴いてほしい、そうした願いをこめて次のほととぎすのすばらしさを強調する。

(9) ほととぎすは、なほさらにいふべきかたなし。いつしかり顔にも聞えたるに、卯の花・花橘などにやどりして、はたかくれたるも、ねたげなる心ばへなり。

・五月雨のみじかき夜に寢覺をして、いかで人よりさきにきかむとまたれて、夜ふかくうちいでたるこゑの、らうらうじう愛敬づきたる、いみじう心あくがれせんかたなし。六月になりぬれば音もせずなりぬる、すべていふもおろかなり。

〈四一・鳥は〉

いつ鳴くかいつ鳴くかと待たせておいてやっと鳴き出したと思つたら卯の花や橘に隠れて姿は見せない。そしてそれもほんのわずかだけ、六月にもなるとさっと姿を消してしまふ。ほととぎすの性情が極めて印象的に把握されているが、思うように姿を見せない、声を聞かせない、そのもの足りなさ、心残りの非充足感を基調の一つの美的世界が築かれている。

そしてこれは人事を中心にさらに多様な形を伴って発展してゆく。たとえば、

(10) 綱代ははしらせたる。人の門の前などよりわたりたるを、ふと見やるほどもなく過ぎて、供の人ばかりはしるを、誰ならんと思ふこそをかしけれ。ゆるゆると久しくゆくはいとわろし。

〈三一・檳榔毛はのどかにやりたる〉

(11) 講師あてしげしあるほどに、前駆すこしおはする車とどめておるる人、蟬の羽よりもかるげなる直衣、指貫……わかうほそやかなる三四人ばかり……講師もはえはえしくおぼゆるべし、いかでかたりつたふばかりと説き出でたなり。聴聞すなどたふれさわぎ、ぬかつくほどにもならず、よきほどにたちいづとて、……見しりたる人はをかしとおもふ、見しらぬは、たれならん、それにやなど思ひやり、目をつけて見おくらるこそをかしけれ。

〈三三・説経の講師は顔よき〉

(10)は車の走らせ方について、檳榔毛はのどかにやる方がよいとことわった後、綱代はゆっくりせずさつさと走らせた方がよい、門前などで「誰かしら」と思ううちにもう車は見えず供人ばかりが走り去ってゆく。主を見定めぬもの足りなさは残るが、それがかえつてのろのろとこれ見よがしにゆくより快い余情を残す。檳榔毛と違つた綱代の性格を十分に生かしたうえでのものでありである。

(11)は真夏の説経会の折、涼しげな身分ありげな若者が三四人、少しおくれて座につくがあまり長居せずほどよいころにさつと引きあげてゆく。知らぬ人は誰かと思わず後姿を見送つてしまう。最後まで座に留まらぬもの足りなさが不思議なゆかしさを残す。

次は小白河八講の折、同じく遅れてきた見知らぬ女車と君達との場面で、同様の趣きがさらに印象的に綴られている。

（12）後に來たる車の、ひまもなかりければ、池にひきよせてたちたるを見給ひて……「たが車ならん、見しり給へりや」などあやしがり給ひて、「いざ、歌よみて此の度はやらん」などのたまふ程に、講師のぼりぬれば、みなあしづまりて、そなたをのみ見る程に、車はかいけつやうにうせにけり。下簾など、ただけふはじめたりと見えて、こきひとへがさねに二藍の織物、蘇枋のうす物のうは着など、しりにも揃りたる装やがてひろげながらうちさげなどして、なに人ならん、なにかはまたかたはならんことよりは、げにときこえてなかなかなよしとぞおぼゆる。

（三五・小白河といふ所は）

女車に好奇心を抱いた君達は口頭で消息を送るが返事はない。「今度は歌を」と心づもりをするが折から壇上に現われた講師に氣をとられてうちに車はかき消すように失せてしまう。あとには美しい車の装束が残影として残るのみ。果たして車の主は誰であったのか。無言のままに消えてしまったものへの追憶が一種の心理的非充足感を生み、なまじの歌が返される以上の空白美、余白美を触発する。

これは消えた車とその主の無言ゆえのもどかしさとが基調となつてゐるが、ことばの不十分さ、無言・寡黙へのゆかしみという点だけからも同様な趣きを求めることができる。多くの言葉を使つて十分に言い尽くすよりわずかな言い足りないような表現の中にかえつて奥深い抒情を意識する場合である。

つねに文おこする人の、「なにかは。いふにもかひなし。いまは」といひて、……またの日、雨のいたく降る、昼まで音もせねば「むげに思ひ絶えにけり」などいひて、端のかたにゐたる、夕ぐれに、かささしたる者の持てきたる文をつねよりもとくあけて見れば、ただ「水増す雨の」とある、いと多くよみ出しつる歌どもよりもをかし。

△一九三・つねに文おこする人の

14 「しばしもさぶらふべきを、時のほどになり侍りぬれば」などまかり申し出て出づれば「しばし」など留むれど、いみじういそぎ帰る所に、……「いと執念き御ものけに侍るめり。たゆませ給はざらむ、よう侍るべき。よろしうものせさせ給ふなるをよろこび申し侍る」と言すくになて出づるほど、いとるしありて仏のあらはれ給へるところおぼゆれ。

△一本 二三・松の木高き所の

例は決まつて文をくれる人がある日ふと途絶えてしまう。絶交のつもりかと不安に思っている、翌日の夕ぐれ「水増す雨の」と歌の一句を書いてきた。出典は未詳だが恐らく有名な恋の歌であろう。自分のことばは一切なく、他人の歌を、しかもその一部のみを引いたところに十分な歌や消息がある以上の情趣がある。14はしつこい物怪を退散させた高德の僧が人々の留めるのも聞かずに帰る所で、彼の言少なな様子に恐ろしいようなありがたさを覚えている。ともに言葉がおさえられもう少し補いたいようなところにすべてを語り尽くす以上の深みが認められているところである。

枕草子の中には完全に満ち足りた充足的状态にゆたかな美しさを求める一方、以上のような十分にゆきわたらない、何かを補いたいような余白を残しているところにもまた別の余情美を見出していることも多いのである。

## 五 不完全・無為の美

すべてにゆきとどいた完璧な状態にあるものに美しさや立派さを求めるのは当然である。絵の様に装束を整えた人や隅々まで手入れのゆき届いた庭園等、作為をこらした端正な美を賞でることは当然の成行であろう。しかし完璧さや完全さを求めすぎた場合、時に、あまりに整いすぎた味気なさ、息苦しさを覚えることも一面にあ

り、葵上などはその典型的な例である。

源氏物語にはそうした完璧さの反面、それと対照的なとり繕わない自然な、しどけなさすら感じさせる状態に無造作な安らぎにも似た美しさを見出している場合がしばしばある。久しい煩いなどで十分に身づくろいなどしていない状態、善美を尽くさず簡単な身なりでのくつろぎ姿、百パーセントの完全さ、作為を求めぬ、あるがままの気を抜いた状態にかえって心深いゆたかな趣きを感じとっているのである。たとえば次の光源氏と大君の姿で、

⑦(内大臣は)葡萄染の御指貫桜の下襲、いと長う尻ひきて、ゆる／＼とことさらびたる御もてなし「あな、きら／＼し」と見え給へるに、六条殿は桜の唐の綺の御直衣、今様色の御衣ひきかさねてしどけなきおほ君姿、いよく／＼たとへんものなし。

〔行幸・七九〕

⑧かひな／＼ともいと細うなりて……こゝら久しく悩みてひきも繕はぬけはひの心解けず恥づかしげに、限りなうもてなしさまよふ人にも多うまさりて、こまかに見るまゝにたましひもしづまらん方なし。

〔総角・四六一〕

⑨は玉鬘をめぐって内大臣と光源氏が対面する折、見事に装束いた内大臣よりも大君姿にさりげなく寛いだ感じの光源氏の方が遙かにすばらしいという、⑩は臨終に近い宇治の大君の姿で、久しい病で無造作にしたままの状態がなまじに繕った人には見られない奥深く透明な美しさがあるという。それぞれ作り物語の超理想的人物で、現実生活に取材した枕草子と単純に比較できるとは限らないが、この草子の中にも完璧さから逸脱した不完全、無作為を志向する美意識はある程度認められるのである。少し乱れ気味の髪や服装、あまり人工を加えずあるがままに任せた自然、整いすぎないさりげない状態のものにかえってゆとりのある広がりや深みを見出していることがある。たとえば人の髪では、

(1)いと濃き衣のうはぐもりたるに黄朽葉の織物、薄物などの小桂着て、まことしうきよげなる人の、夜は風のさわぎに寝られざりければひさしう寝起きたるままに、母屋よりすこしあざり出でたる、髪は風に吹きまよはされてすこしうちふくだみたるが、肩にかかれるほど、まことにめでたし。

〔二〇〇・野分のまたの日こそ〕

(2) 朝ぼらけのいみじう霧りたちたるに、二藍の指貫に、あるかなきかの色したる香染の狩衣、白き生絹にくれなぬのどほすにこそはあらめ、つややかなる、霧にいたうしめりたるをぬぎ、鬢のすこしふくだみれば烏帽子のおし入れたるけしきも、しどけなく見ゆ。

△三六・七月ばかりいみじうあつければ

野分の風に吹きまよわされて少し乱れた髪が肩にかかった美しい娘、朝霧の中、寝乱れた鬢を烏帽子の中におし入れた貴公子、それぞれややくずれた風情に端麗に整えた髪とは別のゆとりある美しさを覚えていゝる。

次は服飾に関するもので、たとえば、

(3) なまめかしきもの……をかき上げなる童女の、うへの袴など、わざとはあらでほころびがちなる、汗衫ばかり着て、卯榎・葉玉などがくつけて、勾欄のもとなどに、扇さしかくしてゐたる。

△八九・なまめかしきもの

(4) すきずきしくてひとり住みする人の、夜はいづくにかありつらん、晩に帰して、やがて起きたる、ねぶたげなるけしきなれど、硯とりよせて墨こまやかにおしすりて……心とどめて書く、まひろげ姿もかきう見ゆ。

△一九一・すきずきしくてひとり住みする人の

うへの袴がちよつと綻びて汗衫に葉玉などをつけた童の姿、しどけなく寛いだ様子(まひろげ姿)で後朝の文を認めている一人住みの男、素材や着方にちよつと手を抜いたような様子に非常な心ゆかしさを覚えている。そして後者の例をさらに印象的に強調しているのが次である。

(5) あかつきに帰らん人は、装束などいみじううるはしう、烏帽子の緒、元結かためずともありなんとこそおほゆれ。いみじくしどけなく、かたくなしく直衣・狩衣などゆがめたりとも、誰か見知りてわらひそしりもせん。

△六三・あかつきに帰らん人は

ぱつとはね起きさつさと手際よく服装を整えて帰る男に対して、余韻を残しながら風情ゆたかに去る男、こうした場であまり几帳面に身構えるのは事務的で魅力がない、少し無造作な方がかえって細やかな余情が残るようである。

こうした状態はそれにふさわしい時と場と人とがうまくかみ合わされた時はじめて効果的な雰囲気期待され

るのであるが、場合によつてはその人間そのもののゆとり、幅、器量等を示すよすがとなることもある。たとえ  
ば、

(6) 碁をやむごとなき人のうつとて、紐うち解きないがしろなるけしきに拾ひ置くに、おとりたる人のゐずまひもかしこまり  
たるけしきにて、碁盤よりはすこし遠くおよびて、袖の下はいま片手してひかへなどしてうちぬたるもをかし。

〈一四六・碁をやむごとなき人のうつとて〉

(7) 淑景舎は……紅梅いとあまた濃く薄くて、上に濃き綾の御衣、すこしあかき小桂……いとうつくしげに絵にかいたるやう  
にてみさせ給へるに、宮はいとやすらかに、いますこしおとなびさせ給へる御けしきのくれなるの御衣にひかりあはせ給  
へる、たぐひはいかでかと思えさせ給ふ。

〈一〇四・淑景舎、東宮にまゐり給ふほどのことなど〉

(6)は貴人と身分の劣る者との対碁の場面で、威儀を正してかしこまる人に対して、服装も乱れがちに余裕をもつて  
臨む人、さりげない無作為な姿態が人としての格の高さを示している。(7)は妹の淑景舎女御と定子との対面の  
場で、人形のように端正に飾り整えた淑景舎に対し、ゆつたりとやすらかに振舞う、らうたけた定子の姿が印象  
的である。

これまで主に人事を中心に見てきたが、自然を素材としたもの、また自然と人事が交錯している場合にも同様  
な傾向が見出される。

(8) いつもすべて、池ある所はあはれにをかし。冬も水したるあしたなどはいふべきにもあらず。わざとつくるひたるよりも  
うち捨てて水草がちに荒れ、青みたる絶え間絶え間より月かげばかりは白々と映りて見えたるなどよ。

〈一本 二七・池ある所の五月の長雨のころこそ〉

(9) 女のひとりすむ所はいたくあばれて築土などもまたからず、池などある所も水草あ、庭なども蓬にしげりなどこそせねど  
も、ところどころすなごの中より青き草うち見え、さびしげなるこそあはれなれ。ものかしこげになだらかに修理して門  
いたく固め、きはぎはしきはいとうたてこそおほゆれ。

〈一七八・女のひとりすむ所は〉

わざと繕いたてたより自然に任せて所々水草が生えたような池、そこに白々と月影が映るさまは人工を尽くし整  
えた池にはない趣きがある。また女のひとり住みの家、門や築地の修理もゆき届かず池も庭も荒れかげんな様こ

それともいぬ風情がある。これは源氏物語の雨夜の品定めや須磨の巻の花散里姉妹のわび住いのさまなどと繋つてゆくものであろう。

枕草子の中にはこのような源氏物語へのヒントとなるものも含まれて、手を加えすぎない無為・不完全な状態への憧れが確かに育まれているように思う。

## 六 結 び

花やかな明るい鮮明な美で満たされているような印象の強い枕草子、確かにこの作品にはそうした傾向が随所に見られ、定子を中心とした中関白家の宮廷絵巻は枕草子の最も枕草子らしきイメージそのものともいえる。

しかし一歩たち至つてその詳細に接するとき、源氏物語との際やかな対照が想定される明るい積極性への志向の強い美意識に交つて、やや方向を異にするもう一つの美学が介在することも見過ごすことはできない。蘭たけ、残り・消え・ほのか・かすか・不十分・不完全等、すべてに充足している状態ではなく何らかの形で欠ける所のある、程度を抑えた、非充足的なものに対しても別次元の美が多様な形を伴つて触発されている場合が少なくないのである。

源氏物語は枕草子と対照的に評価されることが多く美意識の問題も例外ではないが極めて源氏物語的と考えられる美学——とくに非充足的側面、反枕草子的と見做されるもの——と基本的には相通するような美的感覚がこの草子の中にも潜在しているのである。きわめて対照的に評価されがちな二つの作品の美意識が底辺において僅かながらも通いあうものをもっていることは源氏物語の美学の生成に対する枕草子の存在が改めて問い直される機縁になるところかもしれない。

ところで後の俊成や定家は源氏物語を愛しその価値を——もちろん美的側面においても——それまでになく高く評価したが、その要因の一つに、その中にある中世美学的イメージの強い非充足的消極美への憧れがあったのでは

ないかという推測は十分成り立つと思うが、枕草子の中にも形態・程度は様々であるが、それに近い、少くとも同系統のものが流れていることは確かである。が、枕草子は彼らによって源氏物語ほどに重視されなかった。いや、ほとんど問題にされなかったともいえる。もし枕草子の中に源氏物語と同じサークルに属する美学が育まれていたとしたらなぜ彼らはそれに気づかなかったのか、また仮に気づいたとしてもなぜ源氏ほどに評価しなかったのか。

現在の我々と同様に枕草子のトーンはあくまで明るく花やかなという印象が先に立ちその内側までは見えにくかったということは十分考えられる。清水好子氏のいわれる「源氏の周倒な計算しつくされた文体と枕のポンポンと物を投げ出すような文体」<sup>(12)</sup>とは同じことを扱ったとしても受ける側の用意・感覚がまるで違ってくるのは当然である。が、しかしこれを俊成らの視線の問題のみに帰してしまつてよいものであるうか。いやそこには二つの作品の美意識の本質的な違いがかかわっているのではなからうか。

同じ非充足的な消極性への志向の強い美意識といつても双方ではやはり内質が異なるものがあるうか。人生の諸相を凝視し人の心の奥深くまで透徹するような思いで筆をすすめてゆく源氏物語ではそこに描かれる美は究極的には悲しみの美学である。人間の悲しみという悲しみを真正面から虚心に受けとめそれと対峙する中に生まれたものなのである。蕭条とした野の宮の景も病にやつれた美しい女人も墨染の若い尼も、衰えた花も消えてゆく虫の音もすべて悲しみのきわみに咲いた花なのである。悲しみを母胎として生まれた美に接するとき人はそれを心から美しいと思ひ、ことに「美」に敏感な歌人たちはことさら深く愛し受けとめたことであろう。

しかし枕草子の基調はあくまで喜びであり明るさであり花やぎであった。またそうあらねばならなかったともいえる。これまで紐解いてきたさまざまの非充足的な美学はやはり枕草子美学の中での一側面なのである。もちろんこの作者が常に精神的に充足され何の屈託もなく明朗一色の世界を写していったのではない。周知の如くそれは逆である。主家の没落をまざまざと目にした彼女は紫式部には経験のない非常に残酷な運命にさらされたのであるが、内心にいかに悲しみを意識していようと筆をすすめるときは彼女一流のやり方であえて明る

く塗りかえようとした。つまり枕草子という作品は暗を明に塗りかえた、それだけに人によってはむなしさを感じずるほどに、より明るくより花やかな輝きが、彼女の天賦の才と性格とを基調にかなり恣意的に添えられているともいえるのである。移ろった花を見ても荒れた庭を見ても喪服にやつれた人を見ても殆どが「をかし」「めでたし」で結ばれ、対象に埋没しない知的把握と機知的な明朗さを忘れてはいない。彼女がもし現実の悲哀にあえて目をつぶるような潤色をせずそのままに受容していたとしたら枕草子の美意識、とくに非充足面でのそれはもっと違ったものになったかもしれない。より源氏物語的カラーに近づいたかもしれない。が、彼女はそれをしなかった。そこにこそ根底に明るさを失わない、中世の歌人たちには見過ごされがちな枕草子的非充足の美が生まれたのではなからうか。

(1)・石田穰二氏「枕草子の美意識」〔国文学〕昭和四十二年六月、「枕草子総説」(鑑賞日本古典文学『枕草子』所収、昭和五十一年、角川書店)

・根来司氏「平安女流文学の美意識——枕草子の美意識」(古代文学論叢第三輯『源氏物語枕草子研究と資料』所収、昭和四十八年、武蔵野書院)、「枕草子のことば」(鑑賞日本古典文学『枕草子』所収、昭和五十一年、角川書店)

・中村義雄氏「枕草子にあらはれた服飾美」(国文学、昭和四十二年六月)

・犬養廉氏「枕草子に見える感覚美」(解釈と鑑賞、昭和三十一年一月)

・清水好子氏「枕草子の言葉の使い方」(解釈と鑑賞、昭和三十四年九月)

・伊原昭氏「枕草子にあらわれた美意識——色彩を中心に——」(鑑賞日本古典文学『枕草子』所収、昭和五十一年、角川書店)

(2)・根来司氏・犬養廉氏・中村義雄氏 前掲書及び注(1)参照。

(3)・小西甚一氏「源氏物語と新古今的表现」(「むらさき」第十二輯、昭和四十九年六月)、「道——中世の理念」(講談社現代新書、昭和五十年七月)

・拙稿「源氏物語における非充足の美」(東京教育大学文学部紀要「国文学漢文学論叢」二十一輯、昭和五十一年三月)

(4) 根来司氏「枕草子の文体の魅力」(国文学、昭和四十二年六月)、『平安女流文学の文章の研究』笠間書院、所収)

(5) 注(3)参照。

- (6) 拙稿前掲書参照。
- (7) 伊原昭氏前掲書参照。
- (8) 詳解・集註・評釈などでは大切な鏡にすこし曇りが生じたのを見出して心ときめきされる意と解し通説となる。が、「くらき」を陰影をおびた状態と解し上等な鏡への心のときめきとすることもできる。(『古典文学大系枕草子頭注』)
- (9) 源氏物語の中にもこの種の美が多く見られる。たとえば、「うへは御心のうちに思しめぐらすこと多かれど、さかしげに亡からむ後などのたまひ出づることもなく、たゞなべての世の常なき有様をおほどかに言少なゝるものから、あさはかにはあらずのたまひなしたるけはひなどぞ、言に出でたらむよりもあはれに物心細き御気色はしるう見えける」(御法・一七九)
- (10) 寺本直彦氏『源氏物語受容史論考』(昭和四十五年、風間書房)
- (11) 注(3)参照。
- (12) 清水好子氏「枕草子の言葉の使い方」(解釈と鑑賞、昭和三十四年九月)、『三才女の文体』(解釈と鑑賞、昭和四十二年三月)